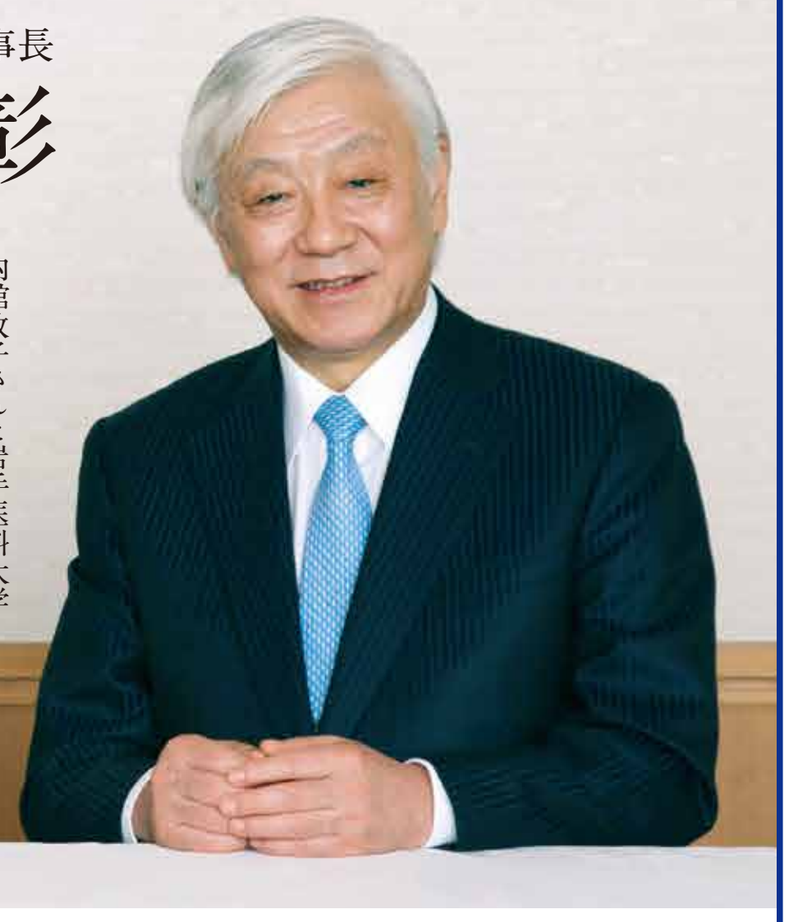
Iwate Medical University 岩手医科大学

歴史に学び、未来を創る

岩手医科大学 創立120周年（2017年）記念対談

脚本家・作家
内館 牧子

岩手医科大学 理事長
小川 彰



内館牧子さんと岩手医科大学との深い絆。そのはじまりは2008年のことです。盛岡文士劇に出演した内館さんはその打ち上げの席で突如倒れ、岩手医科大学附属病院に運ばれてきました。心臓と血管の急性疾患であり一刻を争う状態。すぐに緊急手術が行われ、一命を取り留めました。それから退院までの約3ヶ月、内館さんは岩手医科大学附属病院で過ごし、多くの病院スタッフと出会い、交流は今も続いています。

今回は内館さんと岩手医科大学・小川彰理事長が久々の対面。旧交を温めるだけでなく、話題は岩手医科大学の歴史そして未来へと広がっていきました。

120周年は新しい出発点。岩手医科大学はさらに進化を遂げる。

雪の降る夜に倒れた。そして、そのまま岩手医科大学へ

内館　まさに九死に一生の経験でした。2008年、私は盛岡文士劇「宮本武蔵」に出演していたんですが、打ち上げの席で突然具合が悪くなってきたんです。冷たい風に当たればよくなるかなと思って廊下に出たんですが、そのまま倒れてしまいまして。救急車で岩手医科大学附属病院に運ばれたんですが、運良く日本屈指の名医の岡林均教授が執刀してくださった。

小川　高名な作家さんが運ばれてきたと報告を受けていました。診断の内容を聞くと、相当な重症。命を落としてもおかしくなかったんです。

内館　はい。2ヶ月ICUにいるほどでしたからね。実際、東京に戻ってから、医療関係の友人たちに「岩手医科大学はすごいスタッフが揃っている。倒れた場所が岩手じゃなかったら死んでたかもよ」と言われましたね。

小川　循環器医療センターがクローズアップされますが、実は岩手医科大学には、日本初、世界初というものがけっこうあるんです。例えば昭和24年に、日本で角膜移植の第1号を手掛けたのは本学です。その後、昭和32年に角膜移植法が成立して、全国どこでも、アイバンクはあるし、角膜移植もできるようになった。そういう意味では、移植医療の先駆けと言えます。それから、小児科の名誉教授・藤原哲郎先生が、当時、日本でも有数のNICU（新生児特定集中治療室）というものを作った。例えば800グラムで生まれた赤ちゃんを入れて、温度や湿度を管理するわけなんですが、なかなかうまくいかない。未熟児は肺胞が開かなくて、窒息してお亡くなりになっていく。その状況を見て藤原先生が人工サーファクタントという薬を世界で初めて作った。この薬を使うことで、世界中で約100万人の未熟児の命が救われたと言われているんです。

岩手医科大学に受け継がれてきた医療、新しく生まれる医療

内館　一方で東京の友人・知人たちは、先端医療は、東京の病院じゃないとダメなんじゃないかという考えがあるんですね。「内館は岩手で治療して大丈夫なのか」と心配していたそうです。病院も東京一極集中と思われがちですが、私自身、岩手医科大学附属病院に入院してみて、その考え方は違うなと思うようになりました。

小川　地方にありながら、世界一の医療を提供する。その思いが私たちの根底にあります。

今はキャンパスを新しくしておりますし、数年後には新病院ができます。医療においてはハードも大事な部分。どういう建物を作っていくかということも考えなければならない。

矢巾のキャンパスは、医学部、歯学部、薬学部があるんですが、それぞれ独立した建物はないんです。つまり学部の垣根がないということ。例えば、各学部に似た基礎講座があり、学部ごとに独立してつくる必要はなく、統合基礎講座として一緒にしても良いでしょうと。

文部科学省へは何度も足を運び、3年越しでやっと認めていただきました。

内館　いろいろな垣根を取り払って、知識を共有するっていうのは大きいことですよね。医療の現場でも新しいことが起きるんじゃないですか。

小川　医療というのは、本来、様々な人たちが関わり、チームで対応するのが理想。人と人が交わることで、連携は確実に深まっていくと期待しています。

内館　入院当初は点滴で2ヶ月は何も食べられなかったんです。離乳食みたいな食事になった時に、担当の先生に「これさえ食べられない。だから、点滴に戻してほしい」って言ったんです。そうしたらその先生が「一本の点滴よりも、一口のスプーンですよ」って言われたんです。目が覚めましたね。それからごはんを頑張って食べるようにしましたら、みるみるよくなっていくんですね。

それともう一つ。リハビリで理学療法士の先生が、今日はこういう運動を20回やりましょうって言う。そして、次の日は25回。そうすると、朝来た看護師さんが「内館さん、すごい。昨日より5回多くできたんですね」って言ってくれるんです。病院内のスタッフで、患者の状況がちゃんと共有されている。人間のあったかさや患者を治そうという意識をものすごく感じました。

脚本家・作家 **内館 牧子**（うちだて まきこ）
秋田県生まれ東京育ち。武蔵野美術大学を卒業後、三菱重工業入社。13年半のOL生活を経て、脚本家デビュー。主な作品に「都合のいい女」（フジテレビ）、「私の青空」。女性初の横綱審議員を務めるなど、格闘技好きとしても知られる。

小川　かつての岩手・北東北は、貧困に喘ぎ、患者さんが苦しんでいた。それを見て、創立者の三田俊次郎が私財をなげうって、明治30年に創ったのがこの学校です。その時に看護学校、産婆学校もいっしょにつくった。当時から、医者だけを養成してもダメだという考えがあったんでしょうね。今で言うチーム医療です。そして「医療人である前に、誠の人間であれ」という精神。病んでいる方々の気持ちをちゃんと認識して、奉仕していくということです。これは今も綿々と受け継がれる岩手医科大学の伝統と呼べるものです。

「東日本」にある大学として取り組んでいくこと

内館　私は秋田生まれで、父は生まれも育ちも盛岡。やはり東北は特別な場所です。東日本大震災でも岩手医科大学は重要な役割を担っていると伺いました。

小川　東日本大震災発災後、通信機能も途絶えました。岩手県は沿岸南部から北部まで約200キロあるんです。被災地の状況がどうなっているかがわからない。当時は5万人の被災者が500ヶ所の避難所に身を寄せていると言われていたんですが、まず状況を把握することに注力しました。それを行うことで、さらに混乱の状況が見えてきた。500人の避難者がいるところに、医療チームが一つ、その二方で50～100人の避難所に、3つの医療チームが入っていたりでバランスが悪い。

私たちは岩手県の被災地に入る医療チームにライセンスを出したんです。このライセンスというのは、医療チームが食事やガソリンを現地調達ではなく、自分たちで用意してくること、雪が降っている時期だったので、ノーマルタイヤではなくスタッドレスタイヤを装着していることなどの条件を付けました。ただし、このライセンスを取得した医療チームは、薬がなくなったら、岩手医科大学で用意した薬をいくらでも持っていっていいというようにしました。

理事長・学長 **小川 彰**（おがわ あきら）
宮城県生まれ。岩手医科大学医学部医学科を卒業。その後、東北大学医学部助教授に就き、米アリゾナ大学・バロー神経研究所に留学。岩手医科大学に戻り、2008年に学長、2012年から理事長に就任。脳神経外科の名医としても知られている。

また、例えば、とある医療チームが入っている避難所があったとして、週末には帰ってしまう。その場合には、別の医療チームにこの避難所へ入ってもらうなど、スケジュールの調整も始めました。

地元の医科大学がリーダーシップを取って進めていかないと、災害医療もうまくいかないということだと思います。

創立120周年、世界に羽ばたく大学へ

小川　明治30年から始まった歴史が120年を迎えます。岩手医科大学は地域医療に根ざし、地域の患者さんを治していきたいという思いから始まった。それは創立当初と変わらず、私たちが重視しているポイントです。

岩手医科大学では「研究のための研究」というのは一切させないんです。あくまでも患者さん中心で考えています。実際の医療現場で活かせる研究を岩手医科大学が担うというつもりでいます。本学のやるべき道、世界に伍していく道は、生まれたシーズを患者さんの治療に活かすような、あるいは診断に活かせるような研究に特化していきたいと考えています。

内館　そういうところが岩手医科大学の個性になっていくと思うんです。患者の視点からすると、個性が際立っていないと、たくさんある病院の中から選べないんですよね。

内館牧子さんから岩手医科大学へのエール

内館　大相撲に、冬の時代がありました。本当に人が入らなくて、マス席でさえガラガラですよ。その時に放駒理事長、北の湖理事長が一貫して言っていたのが、「いい仕事を見せる」ということ。相撲本来とは関係のない人寄せのアイディアはやめようと。いい仕事の積み重ねは時間はかかるんですが、今は札止めが出るほど盛り返してきた。

そういう例を見ていると医療従事者にも、求められる「いい仕事」をしてほしいなと思います。そして、それは必ず人の口の端にのぼるんですよ。この病院で助かった。ここの医師が良かった。ここの看護師は細やかだった。そういう評判は全国に広がっていきます。今、小川理事長がお考えのことも多分共通していることと思います。それを若い学生たちに伝えていってほしいですね。

小川　その通りです。うちは病院だけでなくて、人材育成の役割も担っています。将来を担う素晴らしい医療人を育てていきたいと思っています。

今までもドラマで医療現場を描いたものはありますが、本当はもっと地味で大変なことが多い。いつか内館さんに本当の医療の現場を描いて欲しいなと思います。今日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

岩手医科大学 創立120周年記念事業

矢巾新附属病院建設

- 特定機能病院
- 治療、手術、入院を中心とした機能
- 小児・周産期、救急部門の機能強化
- 県立療育センター及び盛岡都南支援学校を整備し、三次医療拠点ゾーン形成
- 1,000床規模

内丸メディカルセンター（仮称）整備

- 高度外来機能病院
- 日帰り又は短期入院での迅速な検査・診断
- 盛岡市、医師会と連携した1次・2次救急体制
- 歯科医療センターを併設
- 50～100床規模

看護学部の新設（予定）
学校法人岩手女子奨学会より設置者変更する岩手看護短期大学を母体とした、看護学部の設置を計画中

記念イベントの開催
- 学術講演会等の開催
- 学生とOB・OGとの交流イベントを開催

記念式典・祝賀会開催
（2017年4月20日）

教育研究環境の充実

歴史資料の整備

岩手医科大学は2017年に創立120周年を迎えます。

創立120周年記念 ロゴマーク・スローガン決定

IWATE MEDICAL UNIVERSITY 120th · since 1897 ·

誠のあゆみ、未来へつなぐ
岩手医科大学 創立120周年

創立120周年記念ロゴマーク。
学内に現存する最古の建物がモチーフ

2017年に迎える岩手医科大学の創立120周年を記念し、次代に引き継ぐべく選定されたスローガン。建学の精神「医療人たる前に、誠の人間たれ」に由来する。常に改革と挑戦を続けてきた、先人達の輝かしい業績を顕彰するとともに、地域とつながり、世界とつながり発展していく岩手医科大学の未来への期待も込められている。

岩手医科大学 〒020-8505 岩手県盛岡市内丸19番1号
Tel 019-651-5111　Fax 019-624-1231